

このコーナーでは、病院で取り組んでいる様々な事業を紹介します。

ロボティックアームによる人工股関節手術の開始

本院では、令和3年4月よりロボティックアーム手術支援システム「Mako(メイコー)」による人工股関節手術を開始しました。国立大学で初めて本院が導入した「Mako」による手術について紹介します。

股関節は、私たちの日常生活を支える大事な関節のひとつです。加齢、病気などが原因で股関節に異常があると、立つ・歩くといった基本的なものや、靴下が履きにくいなどの動作が困難になり、日常生活に支障をきたすようになります。人工股関節手術(人工股関節全置換術)は、本院では、主に変形性股関節症、大腿骨頭壊死、関節リウマチの患者さんのうち、薬物療法、運動療法などの治療で効果が現れない場合に適用される手術のひとつで、痛んでいる骨を取り除き、特殊な金属やセラミックで人工的に作られた股関節(インプラント)に置き換えるという手術です。個々の患者さんの状態に合わせ、正確な位置にインプラントを設置することが求められます。

人工股関節置換術の対象となる主な疾患		
変形性股関節症	大腿骨頭壊死	関節リウマチ
主に加齢により骨が変形し、関節の骨が曲がってしまう病気。軟骨がすり減って痛みが起こる。本院が対象とする疾患で大半を占める。	大腿骨頭の一部分に血が通わなくなり、壊死(骨組織が死んだ状態)する病気。本院では膠原病の治療に用いるステロイドを原因とするものが多い。	膠原病の一種で、様々な場所の関節に炎症が生じ、痛みやこわばりが出る自己免疫疾患。

人工股関節全置換術は、骨の切除やインプラントの設置など術者の技術に委ねられる手術ですが、本院では長年、CT画像の詳細なデータから、ナビゲーションシステムを用いて、骨の削る深さやインプラントの種類、設置位置について入念な術前計画を行い、術中もナビゲーションでモニタリングしながら手術をすすめるなど、より安全で正確な最小侵襲手術(可能な限り患者さんの身体の負担にならない手術)に取り組んできました。

ロボティックアーム手術支援システム「Mako」はナビゲーションシステムと同様に手術操作自体は術者が行いますが、ロボティックアームの最大の特徴は、アームの動きが術前計画に基づいて制御される点です。つまり、事前に立てられた計画から外れた動きはアームの機能により制御され、手のぶれもなく、不必要な骨の切除や、筋肉、靱帯などの軟部組織の損傷を最小限に防ぐことができるため、従来よりもさらに高いレベルで安全かつ正確に、患者さんに負担をかけずインプラントを設置することが可能となりました。一部の例外はありますが、これまで以上に患者さんの術後の痛みが軽減し、早期に機能回復することが期待できます。

現在、本院での「Mako」による人工股関節全置換術は、骨形状や体型などを考慮し適応を判断しています。今後適応を拡大し、安全性が高いロボティックアームによるこの手術をより多くの患者さんにご提供できるように取り組んでいきます。

整形外科 特任准教授 後東 知宏



左: Mako

右: 人工股関節
(画像提供)

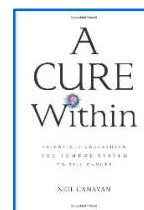
日本ストライカー株式会社

西岡副病院長(診療担当)に、おすすめの本について寄稿いただきました。

副病院長(呼吸器・膠原病内科)の西岡です。今回おすすめの本の紹介ということでご依頼をいただきました。本をよく読む性分ではありませんが、ご指名ですので少し前に読んで刺激を受けた本を紹介させていただきます。

写真の「がん免疫療法の誕生」(メディカル・サイエンス・インターナショナル)という本で、「A Cure Within」という英語本の訳本です。2018年、京都大学の本庶 佑博士がノーベル生理学・医学賞を受賞されたのは記憶に新しいところだと思います。今では「がん免疫療法」はがんに対する標準治療として有効性が高い治療法であるというのが常識です。私自身、長い間がん免疫療法の研究に携わってきましたが、2010年代前半までは「肺がんの免疫療法の開発を…」というような学会発表をしようものなら強烈な批判を浴びていたものです。そのような逆風の中、がん免疫療法の効果に信念をもって研究を進め、現在のがん免疫療法の確立に大きな貢献をした25人のがん免疫研究者のインタビュー記事をまとめたものです。大きな壁を乗り越えてきた研究者たちが何をどう考え、どう生きてきたのか、その人となりまで感じることができる内容になっています。専門用語が出てきますので難しく感じる部分がありますが、1章ごとに1人の研究者が紹介されており、どこからでも読み始めることができます。第1章は本庶博士とノーベル賞を共同受賞されたジェームズ・アリソン博士です。本を読むきっかけは、激しい逆風の中、どの先生が批判にもめげずに臨床試験を推し進めたのか、臨床医の視点からそのキーパーソンは誰だったのかに興味があったからです。購入してすぐに読み終えて、心がスーッとしたのを覚えています。新しい医療に貢献できるように、もっと頑張ろうという意欲が湧いてくる本でした。

副病院長(診療担当) 西岡 安彦



「がん免疫療法の誕生
科学者25人の物語」
Neil Canavan (著)



**食道・乳腺甲状腺外科 特任助教
藤原 聡史**

令和3年度より食道・乳腺甲状腺外科の特任助教として、徳島大学病院へ12年ぶりに戻って参りました。これまでは高知県や県内の急性期病院で、主に消化器疾患を中心に従事してきました。

現在は大学病院で食道疾患(主に食道癌)を中心に手術、検査、病棟業務等をしつつ、JA高知病院へ診療応援(外来、当直、手術)も行っております。

生活スタイルが一変し慣れるのに苦労していますが、同僚や上司のおかげで少しずつ前進しております。また、大学病院には学生時代からの知り合い(先輩や後輩)が多く在籍しており、科の垣根を越えて相談しやすく、魅力の一つと感じています。

今後もチーム医療を行い食道癌の治療成績の向上に努め、患者さんに還元できるよう頑張っていきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。



視能訓練部 視能訓練士 竹林 亮

令和3年度4月より医療技術部リハビリテーション部門の視能訓練士として入職しました。竹林亮と申します。5感の中で人が受ける情報の8割は視覚と言われています。その大切な感覚を治療、維持することができるように

正確で的確な検査結果で眼科医師や他科との連携、患者様に応えることができるようまだまだ未熟で小さな力ではありますが色々なことに挑戦し知識や技術を頼れる先輩方にご指導頂きたいと思っています。

技術はもちろんですが患者様との楽しい会話から検査に必要な情報を採りつつコミュニケーションを取っていけるようになるのも大切だと感じているのですが、千葉県から来たのでエセ徳島人と思われまいように阿波弁の習得を急いでいます。

祖父や父、叔父も働いていた徳島大学病院で大好きな徳島県の地域医療に貢献して行きたいです。



検査部 臨床検査技師 村田 梨菜

令和3年4月より医療技術部・臨床検査技術部門・検査部・細菌検査室に配属となりました。村田梨菜と申します。私は細菌検査室にて、一般細菌検査およびSARS-CoV-2検査を行っております。

一般細菌検査では、細菌のグラム染色像やコロニーの色調、生化学性など学ぶことが多く、先輩方のご指導の下、日々精進しております。また、SARS-CoV-2検査においても、世界的なパンデミックである新型コロナウイルス感染症に医療従事者として携われることに強いやりがいを感じております。

まだまだ至らない点も多々ありますが積極的に学び、知識を深めて安全な医療の提供に貢献したいと考えておりますので、ご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い致します。



歯科麻酔科 後期研修医 高田 真里菜

令和3年度より徳島大学病院歯科麻酔科に入局しました、高田真里菜と申します。徳島大学歯学部を卒業後、徳島大学病院での研修を行った後、今に至ります。

歯科麻酔科では、全身疾患を有する患者さんの歯科治療時のモニター管理や歯科治療に対して恐怖心を持った方などへの静脈内鎮静法、口腔外科や口腔内科の手術時や障害を持つ方の歯科治療時の全身麻酔を行っています。まだまだ知識不足な部分が多々ありますが、先生方のご指導の下日々学ばせてもらっています。人とコミュニケーションをとることが好きなので患者さんと会話するのも楽しく、診療を通じて感謝の言葉を伝えてもらった時には、とてもやりがいを感じます。

患者さんの気持ちに寄り添えるような歯科医師を目指して精進して参りますので、今後ともよろしくお願い致します。



整形外科 医員 井ノ口 崇

井ノ口崇と申します。4月に高知県の近森病院から来ました。

日本脊椎椎間病学会のクリニカルフェローとして、全内視鏡脊椎手術を勉強しております。全内視鏡脊椎手術は、椎間板ヘルニアや

脊柱管狭窄症、一部の慢性腰痛症の患者さんに適用される手術であり、8mmの皮膚切開から局所麻酔下に安全に行うことができる、患者さんに優しい手術です。西良浩一教授は、全内視鏡脊椎手術の分野における、世界のトップサージャンの1人です。この最先端で安全な手術を患者さんに届けるためには、じっくりと学ぶ必要があると感じ、お世話になることに決めました。1年間で150例の全内視鏡手術を経験することが目標で、高知に帰ったらすぐに広めることができるよう鋭意準備中です。どうぞよろしくお願い致します。



東病棟5階 看護師 上田井 和美

令和3年4月より徳島大学病院に入職し、東病棟5階に配属となりました。当病棟は、脳神経外科・脳神経内科・腎臓内科の病棟であり、脳腫瘍や脳血管障害・てんかん・腎不全等の疾患の方が入院されています。

疾患による機能障害を生じる方が多く、日常生活の介助度が高い病棟ですが、少しずつ機能が回復し日常生活に戻れるように努めています。

まだまだ出来ないことが多く勉強不足を痛感しておりますが、先輩方に丁寧にご指導を頂きながら日々頑張っております。先輩方のように、様々な知識を持って状況が判断でき、安全で適切な看護が実践できる看護師になりたいと思います。また、患者さんやご家族にも寄り添える看護師を目指していきたいです。至らない点も多々ありますが、日々精進して参りますので、今後ともよろしくお願い致します。

NEWS・イベント大募集!

「Harmony」は、病院職員を対象に、院内情報の伝達や職員のコミュニケーションの活性化などを目的として発行しております。行事やイベントなどのNEWSや院内で周知してほしいTOPICSなどがありましたら、どんどん病院総務課広報・企画係(bsoumuss1@tokushima-u.ac.jp)までお寄せください。また「Harmony」で取り上げたら良いと思うテーマなど、ご意見・ご提案お待ちしております。

